

## 第2章 史跡を取り巻く環境

### 第1節 自然的環境と社会的環境

#### 1 位置と地形

白老町は北緯 42 度 26 分～42 度 42 分の間、東経 141 度 5 分～141 度 25 分の間位置し、北海道の南西部、胆振総合振興局管内のほぼ中央に位置している。

総面積は 425.64 km<sup>2</sup>であり、東西方向は 28.0 km、南北方向は 26.4 kmに及ぶ。

東側は別々川を境に苫小牧市と接し、西側は伏古別川を境に登別市と接する。北側には 1,000m級の山々が扇状に並び、千歳市や伊達市などと接する。また、南側は全て太平洋に面している。



図6 白老町の位置(1)

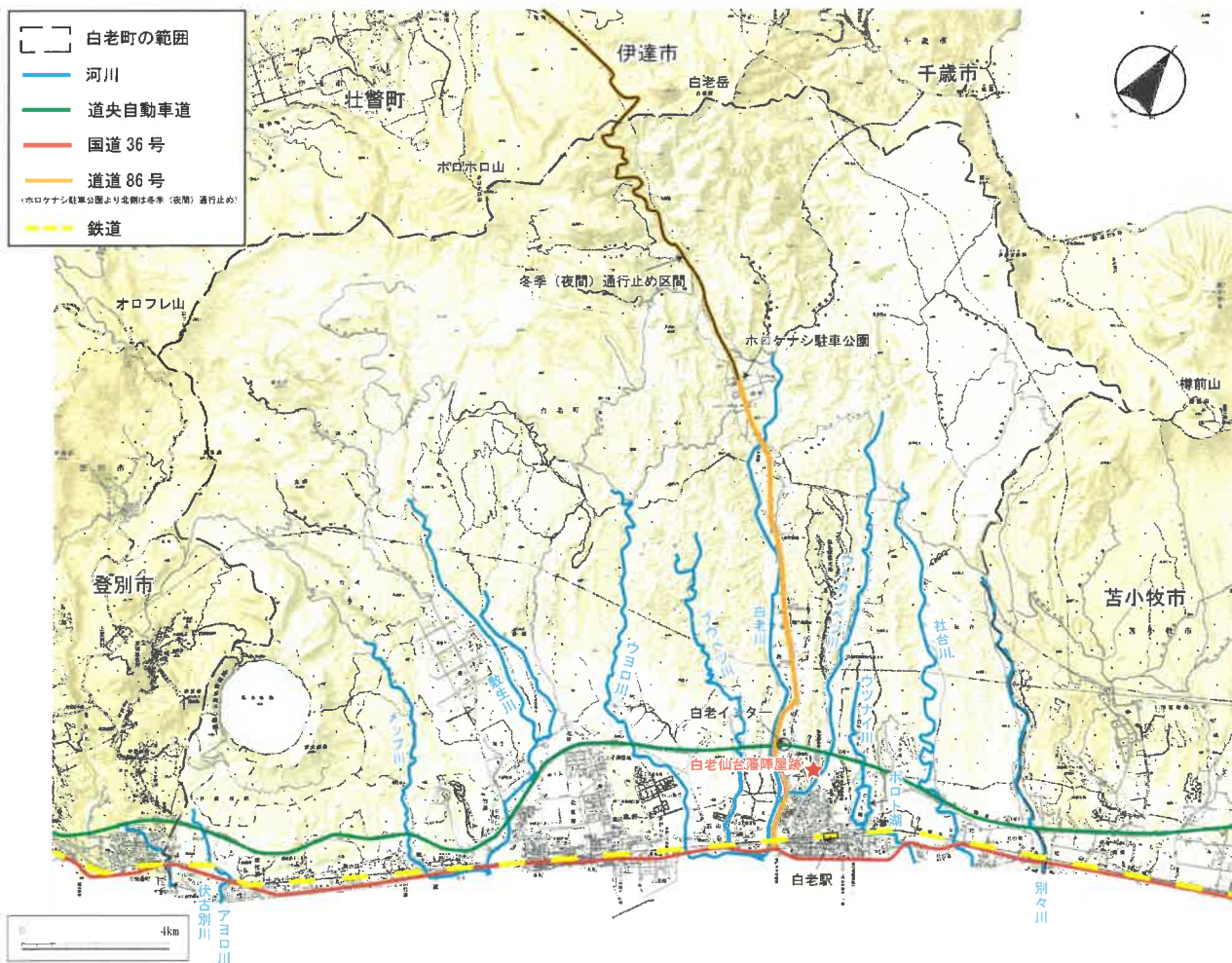


図7 白老町の位置(2)

『白老町全図』(北海道地図株式会社販売)を基に作成

海岸線は延長約 25 km に及び、水量の豊富な大小河川がほぼ南流して並び、その下流域を中心に市街地が形成されてきた。沿岸部はおおむね砂浜で、後背湿地が発達しているが、西部の虎杖浜地区には急崖地帯が形成されている。また、倶多楽火山から北東にかけては、オロフレ山、ホロホロ山、白老岳、樽前山といった標高 1,000m 前後の山々が連なり、大部分が支笏洞爺国立公園区域に属している。

総面積 (42,564ha) の約 8 割を森林 (33,703ha) が占めており、そのうち約 67.2% が国有林となっている。

本史跡は海岸線より 1.5 km ほど内陸の標高 10.6m~11.6m に位置し、東西を標高 80m ほどの舌状台地に挟まれているが、大手より南方は海岸まで平坦な地形が広がる。図 9「白老仙台藩陣屋跡周辺の地形図(2)」を見ると、沿岸の平坦地は苫小牧方面から連続した地形であることが分かる。

舌状台地の間を流れるウトカンベツ川は、度々その流路を変えており、下流域の氾濫対策として昭和 57(1982)年に河川改修工事が実施された結果、現在は本史跡の東側を縦貫している。



図 8 白老仙台藩陣屋跡周辺の地形図(1)

国土地理院地図ホームページ『色別標高図』に史跡指定地等を追記して作成

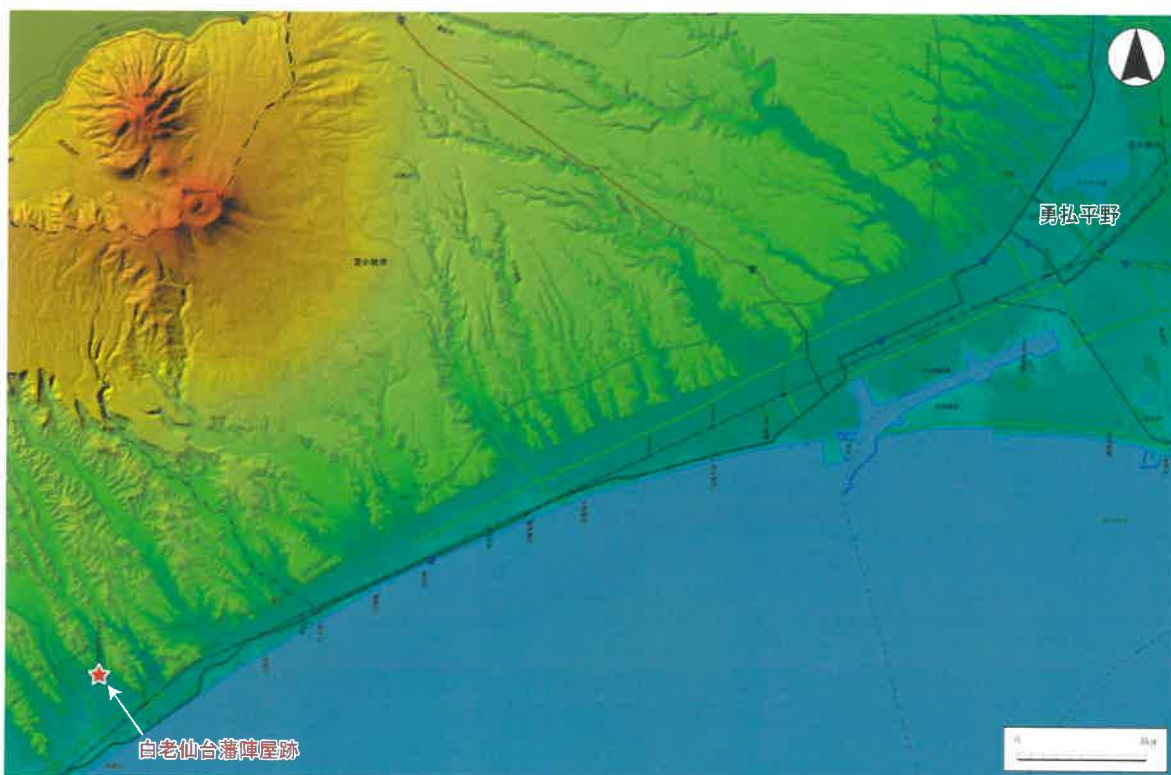


図 9 白老仙台藩陣屋跡周辺の地形図(2)

国土地理院地図ホームページ『色別標高図』に史跡指定地等を追記して作成



## 2 地質

白老町の地質は全般的に比較的若い第四紀層が多い。海岸線に沿って細長く発展する沖積地及び太平洋へほぼ直角に流入する河川の河成沖積地を除くほとんどが山地や台地に包含され、ほぼ全域が有珠山の火山灰や礫などの噴出物に覆われている。降灰年次は新しく未風化で、堅固な4～40mmの浮石や安山岩が堆積している。一部の山岳地帯では第三紀層に属する緑色凝灰岩が見られる。

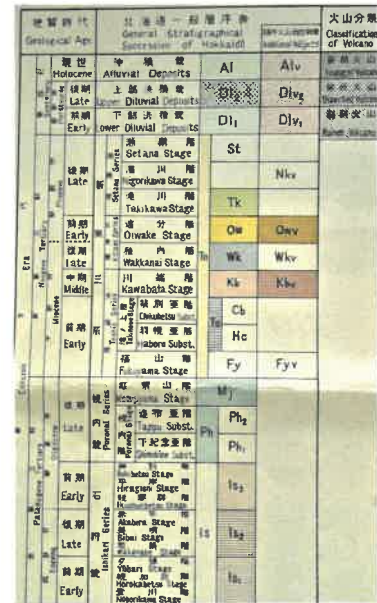
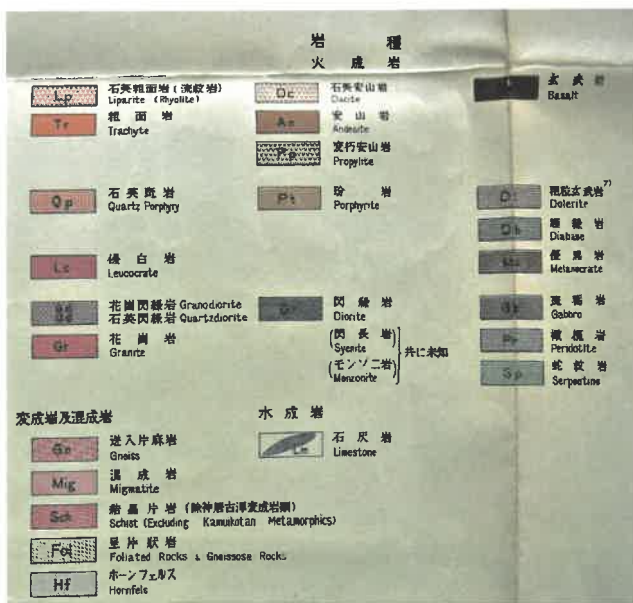
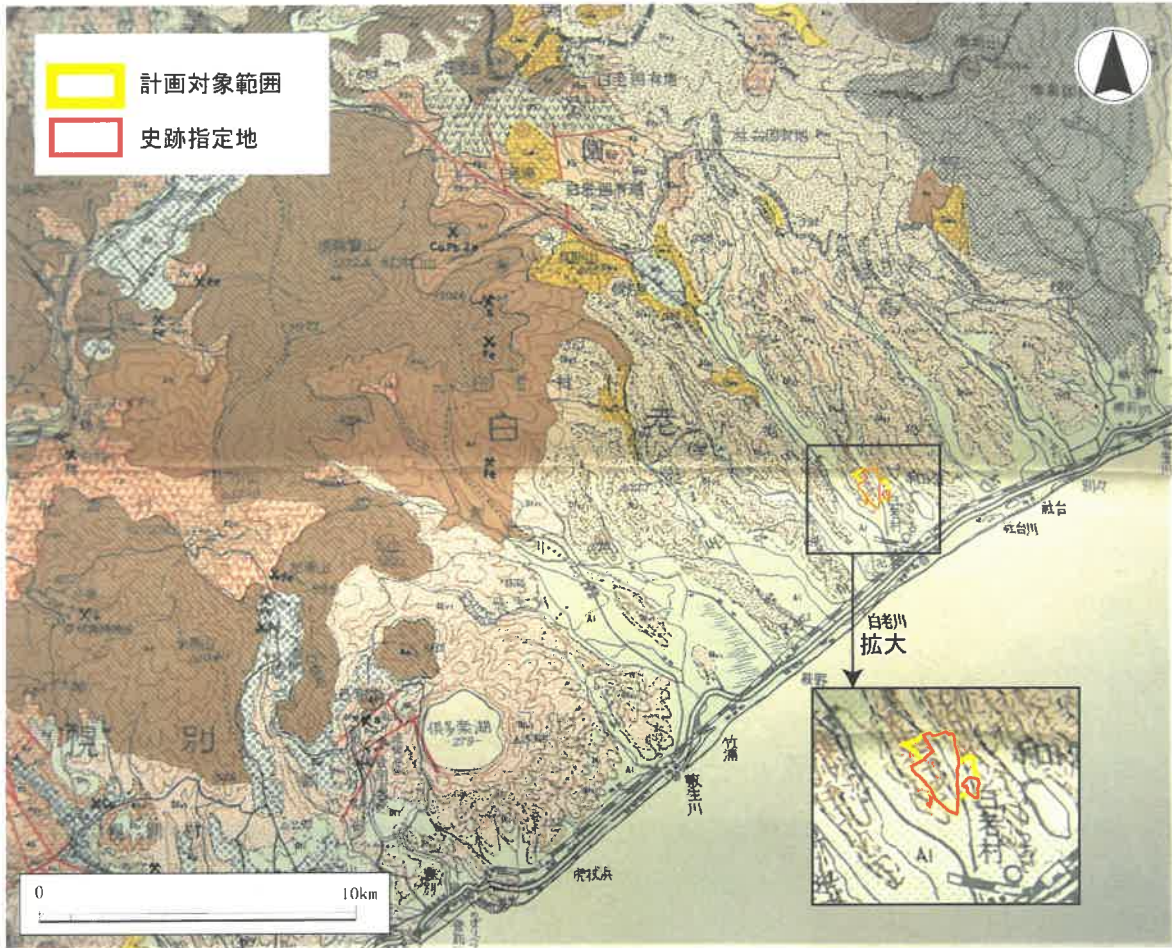


図10 白老町の地質図

北海道地下資源調査所の『二十万分之一 北海道地質図(4)中央南部』を基に作成

### 3 気象

北海道の中にあつては比較的温暖で、夏季と冬季の寒暖差が小さい。降水量は年間平均約 1,500mm であるが、夏から初秋にかけては短時間のうちに多量の降雨に見舞われることがある。冬季の最深積雪は 40～50cm、年間降雪量も 100～150cm 程度であるが、南側を低気圧が通過する際にやはり局地的な大雪に見舞われることがある。

春から夏にかけては西風と南風が多く吹き、秋から冬にかけては北西の風が多くなる。風速は隣接する自治体と比較して半分以下である。冬季及び4月に数日程度やや風速の強い日があり、6～7月には海流や梅雨前線の影響を受け、海水を含んだ多量の霧が陸地を覆う。

表3 過去5年間の白老町中心部の気象データ

区 分	平成 27 年	平成 28 年	平成 29 年	平成 30 年	令和元年	
気 温 (°C)	平 均	8.7	8.0	7.7	8.2	8.1
	最 高	31.3	30.3	31.5	32.4	31.1
	最 低	-12.5	-13.7	-15.7	-17.9	-18.4
降 水 量 (mm)	総 量	1,341.0	2,014.5	1,346.5	1,559.5	1,468.5
	一日最大	81.5	164.0	127.5	83.0	109.0
風 速 (m/s)	平 均	2.8	2.8	2.7	2.8	2.7
	一日最大	11.0	17.0	17.9	22.5	15.3
日照時間 (h)	1,839.6	1,818.8	1,886.5	1,718.5	1,909.0	

### 4 人口

昭和 45(1970)年に 20,000 人を超えた人口はその後増加し続け、同 60(1985)年の国勢調査時には 24,353 人に達した。しかし、平成の中頃から大規模工場の撤退・統合や少子高齢化の進行などもあり、現在の人口は 17,000 人を下回っている。

表4 地区別人口推移(単位:人)

地 区	平成 26 年	平成 27 年	平成 28 年	平成 29 年	平成 30 年	令和元年
社 台	861	830	806	805	786	760
白 老	8,325	8,115	7,986	7,831	7,630	7,496
石 山	1,004	994	971	958	941	932
萩 野	2,610	1,974	1,931	2,466	2,394	2,370
北吉原	2,016	1,974	1,931	1,888	1,877	1,822
竹 浦	2,045	2,024	1,997	1,958	1,906	1,860
虎杖浜	1,585	1,571	1,540	1,530	1,489	1,447
合 計	18,446	18,069	17,751	17,436	17,023	16,687

### 5 産業

第1次産業としては黒毛和牛や鶏卵の生産、優秀な競走馬を輩出する畜産業、多種多様な水揚げを有する漁業、シイタケの生産量が北海道内でも有数の林業などがある。第2次産業には製紙業や食品加工業、土石・材木製造業があり、製造品出荷額が北海道内でも上位である。

第3次産業には、国内トップクラスの水質を誇る倶多楽湖、アイヌ語地名や伝承が残るアヨロ海岸、夏のカヌーや冬のワカサギ釣りで人気のポロト湖など、四季を通して自然の多彩な姿に触れることができる観光業がある。町内には泉質の異なる温泉が湧出しており、モール泉の白老温泉、ポロト温泉、全道一の湯量を誇る虎杖浜温泉は、そのほとんどが源泉かけ流しである。

名産や特産品では、黒毛和種が「白老牛」として商標登録され、「虎杖浜たらこ」も地域団体商標と



なっている。また、白老牛・卵・シイタケや、地元食材を用いたアイヌ民族の伝統料理オハウ、「白老バーガー&ペーグル」や「白老シーフードカレー」などもある。

表5 産業別割合（単位：％）

	昭和60年	平成2年	平成7年	平成12年	平成17年	平成22年	平成27年
第1次産業	9.5	8.8	7.3	7.0	7.5	9.5	10.3
第2次産業	40.9	39.5	38.7	36.2	31.9	28.1	27.3
第3次産業	49.7	51.8	54.0	56.7	60.6	62.4	61.2

※不詳値を含むため100%とにならない

## 6 交通

本史跡へのアクセスは、道央自動車道や国道36号、道道86号が利用される。道央自動車道経由では白老インターチェンジ（以下、「IC」とする。）が最寄りとなる。国道36号はウポポイ開業に合わせて令和2（2020）年に白老町と苫小牧市の区間が片側2車線へと拡幅された。

道道86号は、ホロケナシ駐車公園（図7「白老町の位置（2）」）から先が、冬期のみ夜間通行止めとなる。昭和58（1983）年に道央自動車道白老ICが完成し、片道約2時間を要していた札幌市への移動は1時間程度に短縮された。平成25（2013）年には新千歳空港ICが開設され、空港へのアクセスも40分程度に短縮された。

JR白老駅には、札幌・室蘭間を結ぶ特急「すずらん」や札幌・函館間を結ぶ特急「北斗」が停車する。同駅を起点とした場合、本史跡までの移動は徒歩でおよそ25分を要する。駅北の白老駅北観光インフォメーションセンターからはレンタサイクルが利用でき、所要時間は15分程度である。

そのほか、町内巡回バスや予約制のデマンドバスが運行している。また、試行中であるが、交流促進バスがウポポイ開業に合わせて運行を開始し、元陣屋資料館にも一日5便が停車している。

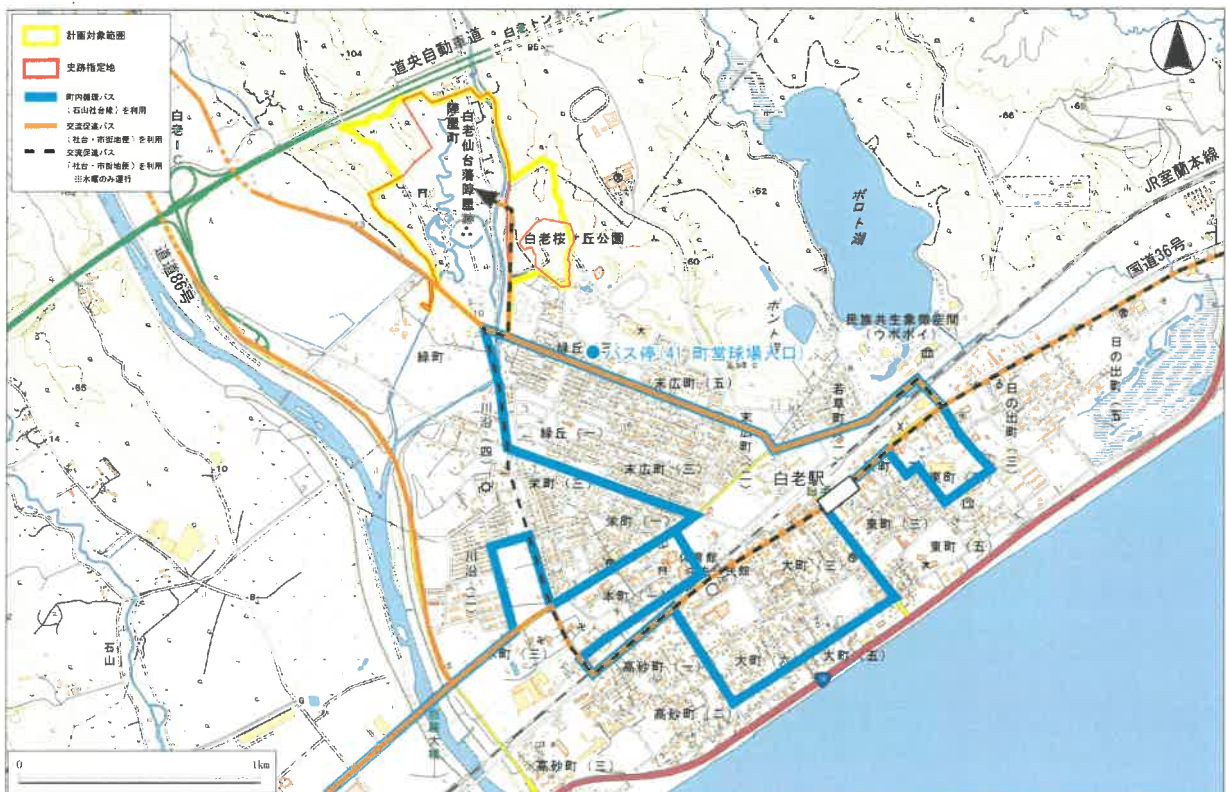


図11 史跡白老仙台藩陣屋跡へのアクセスマップ（バス利用）

国土地理院地図ホームページを基に作成

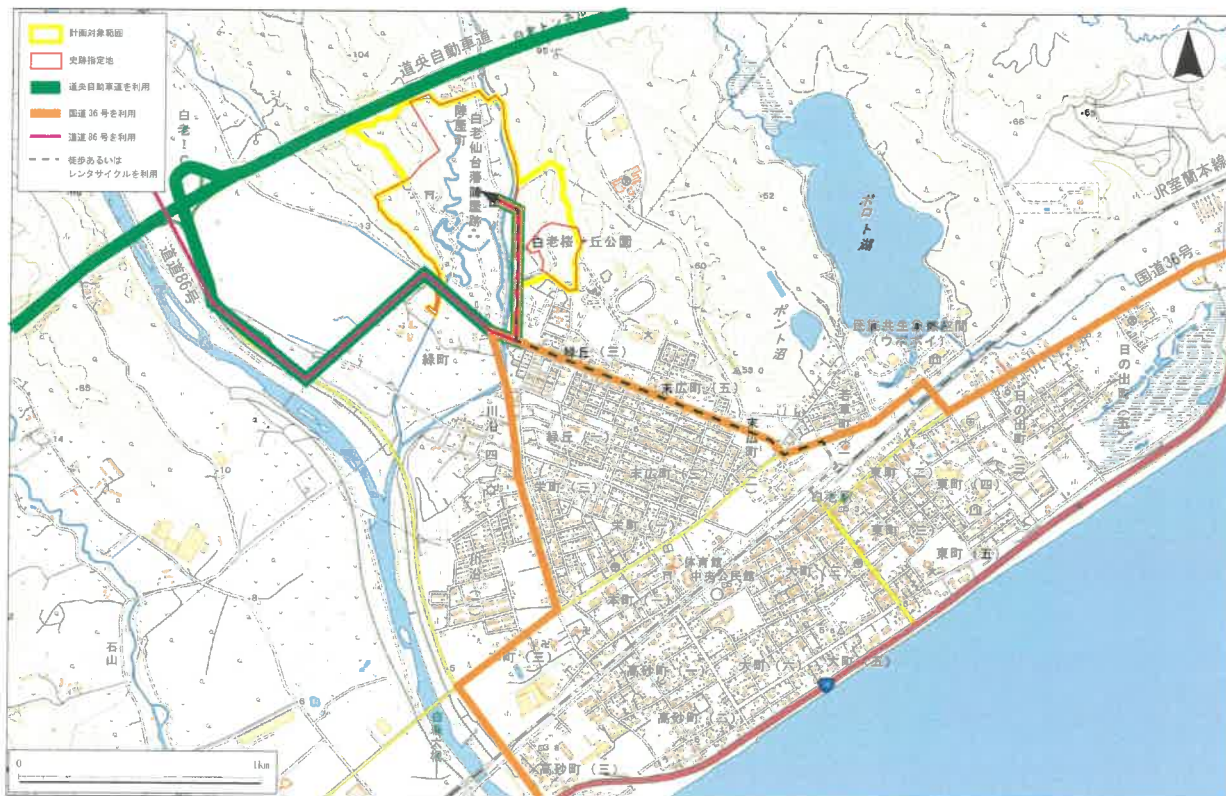


図 12 史跡白老仙台藩陣屋跡へのアクセスマップ（バス以外利用）

国土地理院地図ホームページを基に作成

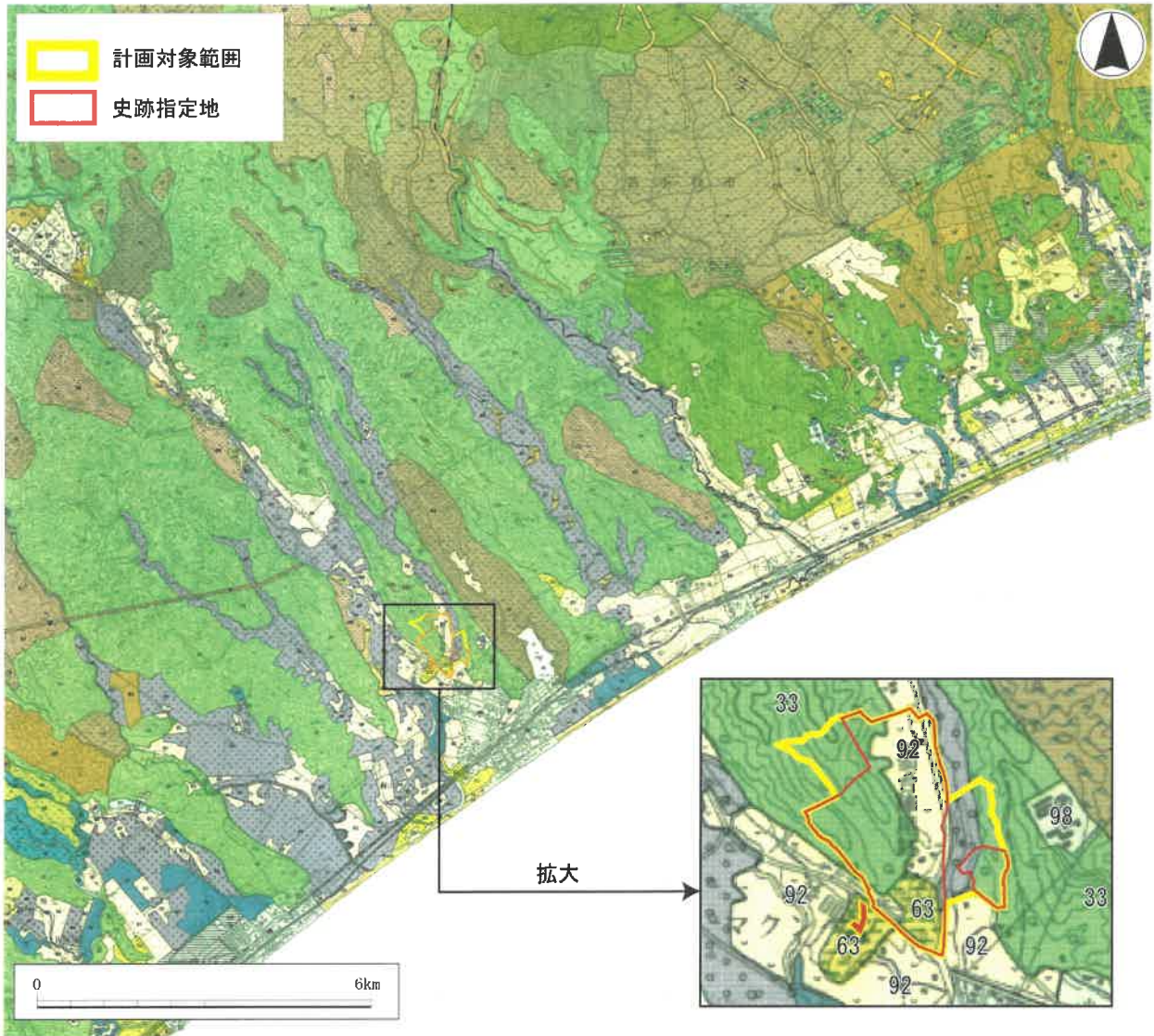
## 7 植生

環境庁による昭和 56(1981)年の『第 2 回自然環境保全基礎調査報告書』によると、東西方向に伸びる沿岸の低地帯では「砂丘植生（砂丘上の草本群落）」や、「自然裸地（植被を欠く地面）」及び「ススキ草原（高茎針葉草本の優占する草原）」が広がっている。後背湿地のうち、市街地や工場地帯以外では「畑地（多年生草本の人工緑地）」が主体であるが、湿地帯や河川流域に「ハンノキーヤチダモ群落（湿潤地の夏緑広葉樹の高木林、亜高木林、低木林）」が現存する。

「ハンノキーヤチダモ群落」は河川沿いに内陸部まで帯状に伸びており、山間の谷地の広狭に応じて群生している。山地や舌状台地では「エゾイタヤーシナノキ群落（夏緑広葉樹の高木林、亜高木林）」などの落葉広葉樹林が主体となる。また、標高が高くなるにつれ、「常緑針葉樹植林（植林による常緑針葉樹の高木林、亜高木林、低木林）」のほか、「ササダケカンバ群落（夏緑広葉樹の高木林、亜高木林、低木林）」などの亜高山帯の植生が主体となる。「常緑針葉樹植林」は、ポロト湖へ流入するウツナイ川流域にも広がる。また、窟太郎山の山腹には「落葉広葉樹植林（落葉広葉樹人工林）」と「落葉針葉樹植林（落葉針葉樹の人工林）」が混在している。

本史跡周辺においては、ウトカンベツ川流域のうち主に左岸が湿潤地の「ハンノキーヤチダモ群集」に区分されている。右岸側は西側舌状台地の麓までが人工の「畑地」だが、内曲輪から町道陣屋通りに接する範囲は「ススキ草原」に区分されている。藩士の墓地及びその周辺も「ススキ草原」である。東西舌状台地は計画対象範囲の全域がハルニレやエゾイタヤが優占する「エゾイタヤーシナノキ群落」である。





- II. 亜寒帯、亜高山帯自然植生**  
Natural Vegetation in Vaccinio-Piceetas Region
- エゾマツ・シロダモハジキ群集  
*Picea japonica - Abies holboellensis* association
  - エゾマツ・ダケカンバ群集  
*Picea japonica - Betula ermani* community
  - ササ・ダケカンバ群集  
*Sasa spp. - Betula ermani* community
  - ミヤコハハ・ノキ・ダケカンバ群集  
*Aino - Betuletum ermani*
- III. 亜寒帯、亜高山帯代償植生**  
Substitutional Communities in Vaccinio-Piceetas Region
- 代償群落  
Plant communities in clear cut area
- IV. ミズナラ・フナクス城自然植生**  
Natural Vegetation in Quercus-Fagetas crenatae Region
- エゾミズナラ・シナノキ群集  
*Acer mono var. alabrum - Tilia japonica* community
  - ハルニシ群集  
*Ulmus davuricus*
  - ヤナギ高木群落  
*Salix spp. tree* community
  - ヤナギ低木群落  
*Salix spp. shrub* community
  - ハルニシ群集  
*Alnus japonica* community
  - ハルニシ・ヤナギ群落  
*Aino - Fraxinetum mandshuricae*
  - 高草草場  
*Altherboa*

- V. ミズナラ・フナクス城代償植生**  
Substitutional Communities in Quercus-Fagetas crenatae Region
- クワ・ミズナラ群落  
*Castanea crenata - Quercus mongolica var. grosseserrata* community
  - ササ草原  
*Sasa grassland*
  - ヌメヒコ草場  
*Miscanthus sinensis grassland*
  - 伐跡群落  
Plant communities in clear cut area
- VI. 河辺・遼原・塩沼地・砂丘植生(各クラス域共通)**  
River-side, Moor, Salt marsh and Dune
- ゴングラス  
*Phragmites*
  - 砂丘植生  
sand dune vegetation

- III. 植林地、耕作地植生(各クラス域共通)**  
Plantation and Cultural Land
- 常緑針葉樹植林  
Evergreen conifer plantation
  - トドマシラ植林  
*Abies sachalinensis* plantation
  - 落葉針葉樹植林  
Deciduous conifer plantation
  - 落葉広葉樹植林  
Deciduous broad leaved plantation
  - 畑地  
Field
  - 耕作放棄地雑草群落  
Weed communities in uncultivated field
  - 牧草地  
Cultivated meadow
  - ゴルフ場  
Golf links
  - 水田  
Paddy field
- IX. その他**  
Others
- 石敷地  
Urban district with a few trees
  - 緑の多い住宅地  
Urban and residential district with many trees
  - 工場帯  
Factory and industrial area
  - 造成地  
Land constructed for residence and factory
  - 開放水域  
Open water
  - 自然裸地  
Natural bare land

図 13 白老町の主な植生帯  
1/50,000 現存植生図「白老」を基に作成



## 8 国立民族共生象徴空間の誕生

令和2(2020)年7月12日、アイヌ民族の歴史や文化などに関する幅広い理解の促進を図り、未来に向けてアイヌ文化の継承と新たなアイヌ文化の発展と創造のための拠点となるウポポイが、ポロト湖畔に開業した。ウポポイは我が国の貴重な文化でありながら、存立の危機にあるアイヌ文化の復興・発展のための拠点となるナショナルセンターである。アイヌ民族の代表的な資料を集めた国立アイヌ民族博物館、古式舞踊の公演や多彩なプログラムを体験できる国立民族共生公園、アイヌ民族による尊厳ある慰霊を実現する慰霊施設からなる。

本史跡は、内閣官房アイヌ施策推進室が主催したアイヌ政策推進会議により、図14「ウポポイの関連区域」のとおり、ポロト湖やポイント沼、ヨコスト湿原、ポロト自然休養林などとともに、中核区域であるウポポイと一体となってアイヌ文化を体験できる関連区域に指定されている。



図14 ウポポイの関連区域  
国土地理院地図ホームページを基に作成



ポイント沼



ヨコスト湿原



ポロト自然休養林



## 第2節 白老町の歴史と文化財

### 1 白老町の歴史

#### (1) 先史時代の白老

白老町に旧石器時代の遺跡は発見されていない。縄文時代の遺跡からは、貝殻や魚の骨を利用して土器に文様を付ける文化が確認されている。

縄文時代の前期から中期は現在より気温が高く、海岸線が内陸まで入り込んでいた。虎杖浜地域には、この時期の環境に適応して、豊かな海産物を採取して暮らした痕跡が多く発見されている。貝殻などを集積させた貝塚が特徴的な遺跡には「虎杖浜2遺跡」があり、現在の北海道では獲れないマダイやハマグリなどが確認されることから、当時は、入江や湾の発達と暖流の影響が強かったとされる。

また、当時は本州との交流も盛んであったと考えられ社台地区で発見された「社台1遺跡」からは、北海道外から入手した塗料で彩色した土器が出土し、後述する白老町指定の有形文化財となっている。

本州で稲作文化が拡大する時代も北海道では狩猟や漁撈文化が継続したため、続縄文時代と呼ばれる。この時期に該当する虎杖浜地域の「アヨロ遺跡」では、道南の恵山文化に含まれる土器が大量に出土した。恵山文化の土器は、東北地方まで伝わっていた弥生文化土器の影響を受けて北海道で独特に発達した土器である。恵山文化との関わりがある遺跡には「アヨロ川傍遺跡」や「虎杖浜7遺跡」もあり、いずれも虎杖浜地区に位置する。



虎杖浜2遺跡



社台1遺跡出土の朱塗り土器

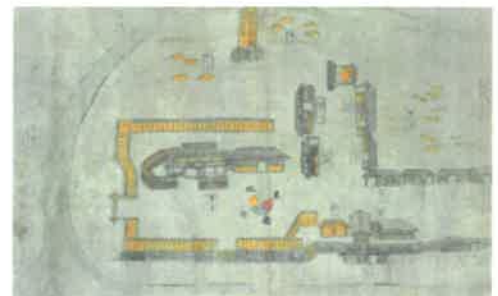
#### (2) 江戸時代までの白老

徳川幕府は松前藩へアイヌ民族との交易権の独占を認め、蝦夷地の各地には交易のための拠点である「商場」と呼ばれる場所が設定された。

アイヌ民族は狩猟採集で得た品や周辺の諸民族との交易から得た品などを、松前氏を始め東北の各地域と自由に交換していたが、次第に各商場における和人主導の交易関係が確立していった。

商場は松前藩の家臣が経営する地域と松前藩が直接経営する地域に分けられ、後に述べる幕府による第1次直轄期まで、虎杖浜地域にも「アヨロ場所」と呼ばれる松前藩直営の商場が設定されていた。「シラライ場所」を含めた商場の範囲は、ほぼ現在の白老町の範囲と一致するが、社台地域は時折、苫小牧側に設定された別の商場となっていた。

やがて商場では和人商人の資本力の影響が強まり、商人が運上金を松前藩へ支払って経営を行う「場所請負制」が一般化した。商人主導となったことで和人の利益を偏重した経営方法が常態化し、蝦夷地の各地ではアイヌ社会の疲弊が進んだ。蝦夷地から大量にもたらされる魚粕により、



白老会所  
『松前東蝦夷地道中図絵』  
(北海道立図書館北方資料室蔵)

本州の農業は大いに進展したが、松前藩がそうした不平等な関係を是正することはなかった。

ロシアの南下政策により蝦夷地の情勢を危惧した幕府は、寛政 11(1799)年に東蝦夷地全域を直轄化した。津軽藩と南部藩に出兵を命じ、白老を含む砂原（現森町砂原）から浦河までは津軽藩が担当した。また、これ以降は短期間であるが、東蝦夷地の場所請負制が廃止された。各場所は幕府の直掬となるとともに、アイヌ民族へは農業の奨励や日本語の習得などの、いわゆる同化政策が執られた。後に蝦夷地全域が直轄化されると、東蝦夷地の警衛は南部藩の担当となった。

文政 4(1821)年、この頃にはロシアの南下政策が沈静化したため、幕府は松前藩を復領させることに決めた。既に文化 9(1812)年には各場所の直掬も完了しており、入札制度を加えた場所請負制が復活していた。しかし、直轄時代の同化政策が継続されることはなく、各場所ではアイヌ民族の酷使が再発したことに加え、外国船の往来も頻発するようになった。白老近郊では天保 2(1831)年と弘化元(1844)年に室蘭沖への来泊があった。

幕府が第 2 次蝦夷地直轄を決めた安政 2(1855)年の白老場所は、野口屋又蔵が請負っていた。野口屋は天保 12(1841)年から白老の場所請負人であり、仙台藩の白老元陣屋警衛にも大いに協力している。他の地域ではアイヌ民族の人口がおしなべて減少していたが、白老場所では増加しており、これは野口屋の手腕によるとする見方が一般的である。松浦武四郎の『東蝦夷日誌』（参考資料 4 コ）によると白老場所では鱒漁が盛んであり、一帯では昆布やサケを主産物とし、マスやタラ、ニシンのほか、鹿皮やシイタケも豊富に出荷されていたという。

### (3) 明治期の白老

明治 2(1869)年 8 月から白老は一関藩による分領支配が開始された。同 5(1872)年 4 月までの短期間であったが、農地の開拓や道路橋梁の改修などを手掛けるなど、町の基礎づくりに尽力した。同 12(1879)年には戸長役場が設けられ、敷生村、白老村、社台村を統括する戸長が配属された。白老場所の請負人であった野口又蔵も、白老郵便取扱人を務める傍ら 2 代目戸長に任命されている。

この間、白老には札幌と室蘭を結ぶ「札幌本道」が開通している。開拓使次官の黒田清隆が提議した「開拓使十年計画」の一つであり、明治新政府が掲げる産業振興策の要事であった。室蘭は小樽や函館に並ぶ港湾機能が期待されており、インフラの整備が精力的に進められた。明治 15(1882)年には小樽の手宮棧橋から岩見沢の幌内炭鉱間が開通しているが、これに続く区間が岩見沢から室蘭を結ぶ鉄道であった。同 25(1892)年には白老駅が開業し、白老はこのように北海道の流通を支える都市の途中にあることから、比較的早い時期に幹線道路や鉄道の恩恵を受けている。

明治天皇による明治 14(1881)年の北海道巡幸は、これらインフラ整備などの成果を開拓使が披露するためのものであり、小樽港から上陸した明治天皇は札幌本道を通過し室蘭港から帰京している。この時、明治天皇は現在の本町にあった駅通に宿泊しており、夜には白老アイヌによる模倣的な儀礼などが披露された。現在の駅通跡には後年に住人が建立した「明治天皇行在所碑」が残されている。この頃の本町地区は村の中心地であり、村役場や郵便局、小学校や神社などが軒を連ねていた。



明治天皇行在所碑（本町）



本町の町並み



白老小学校は昭和時代に大町地区へ移転するまで、室蘭本線の北側にあった。また、明治32(1899)年には現在の日の出地区にアイヌ民族の子弟を対象とした白老第二尋常小学校が開校している。同学校は大正時代に現在の高砂地区へ移転し、昭和12(1937)年に白老第一尋常小学校に統合されるまで存続した。

### (3) 大正期の白老

札幌本道に加え、白老の重要なインフラに北海道道86号がある。本道は白老川に沿って北上し、現在は伊達市大滝区となった徳舜別へ至る幹線道路である。明治44(1911)年に有志による「白徳道路開削期成同盟会」が結成され、寄付金を得ながら独力で事業を敢行し、大正2(1913)年に全線が開通した。

その後も白老村では道路改良の陳情を室蘭支庁へ続け、終戦後の23(1948)年に道路改修へ着手している。改修工事が始まった背景には、旅客輸送の利便性だけではなく、沿線の豊富な鉱物資源や森林資源が戦後の産業振興にとって不可欠という認識もあった。

大正時代の特徴の一つに、観光客の増加が挙げられる。特に大正8(1919)年頃からは、現在の高砂地区にあった白老コタンを目的とした来村者が増加した。明治天皇の白老巡幸が全国的に報道されたことで、アイヌ民族の存在が知れ渡ったことに加え、明治中頃までに整備されたインフラの状況も背景にあったと考えられている。当時の白老コタンには伝統文化をよく知る古老が多数おり、たびたび訪れる皇族の視察や観光客への解説などを行っていた。

この頃の白老では、文人同士の交流が盛んに行われていた。一例では白老郵便局長を勤めながら白老アイヌの文化や伝承をまとめ、『アイヌの足跡』と題して発行した満岡伸一や、その妻の満岡照子の活動が挙げられる。照子は自選の詩歌を新聞などへ投稿し、数冊の歌集を残した。また、道内外の文人を招いた歌会をたびたび催しており、並木凡平や前田夕暮などの著名な歌人が夫婦の案内を頼りに白老を訪れていた。

室蘭本線の南側で町づくりが進む一方、北側では農地化の試みが続けられた。ウトカンベツ川流域の湿性地を利用し、漁業や林業の兼業として、アワやヒエなどの雑穀、大根や馬鈴薯の栽培が進められた。このうち、大根栽培は積雪が少なく寒冷な白老の気候に適しており、漬物用として大量に作付けされた。また、米の栽培に力を注いだ農家もあり、ウトカンベツからの取水による灌漑工事が行われた。しかし、火山灰地の土壌は農業には不向きで、やがて市街地化などによる離農により、次第に収束していった。



白徳道路の頃



白老コタン



満岡伸一郎での歌会の様子



大根栽培の様子

#### (4) 昭和期の白老

望ましい成果の上がない農業に代わる産業として、酪農の導入が進められた。「子返し制度」と呼ばれる貸付けにより牝牛の飼養が試みられたが、戦後になると肉牛飼育へと転換した。昭和 29(1954)年、白老町と風土が似た島根県より黒毛和牛を買い入れ、同 31(1956)年には、肉牛の貸付事業を開始した。同年には白老和牛生産協同組合が設立され、昭和 50 年代には全国和牛能力共進会で優等賞を受賞する牧場も登場した。また、平成元(1989)年からは「白老牛肉まつり」が開催されるようになり、近年では 2 日間で約 5 万人が来場する一大イベントに成長した。



全国和牛品評会の様子

第 1 次産業が主体であった白老町にとって、観光資源の開発は長年の課題であった。現在でこそアイヌ文化や風光明媚なスポットで知られるポロト湖だが、観光資源として着目され始めたのは昭和 30 年代になってからだった。昭和 36(1961)年、湖畔にボートの発着場が整備されたことを契機に、同 40 年代にはドライブインやレストラン、温泉ホテルなどが建設された。白老町もポロト湖畔をメイン会場に町制施行 10 周年記念式典を挙げるなど、地域を挙げての観光地化が進められた。財団法人アイヌ民族博物館の前身である町立白老民俗資料館が開館したのもこの頃である。先祖の教えを伝え残したいと願う古老たちが集い、踊りや文化の解説などを通じた学術的な空間が維持され、ウポポイの誕生へとつながっている。

昭和期の産業構造の変化を語る上で欠かせないのは、大昭和製紙株式会社など大規模工場の進出がある。同社は昭和 34(1959)年に萩野地区で工場建設に着手し、翌 35(1960)年から白老工場の操業を開始した。工場用地周辺の字名が新たに「北吉原」となり、同名の駅舎が誕生したほか、工場の北側を中心に従業員の居住区が整備された。同社所属の野球チームが同 49(1974)年の「第 45 回都市対抗野球大会」で優勝し、北海道勢として初めて優勝旗を持ち帰ったことで、白老町のスポーツ文化は大いに盛り上がりを見せた。同 51(1976)年、白老町議会は、「スポーツ都市宣言」を議決し、記念事業としてマラソン大会を実施している。



大昭和製紙北海道野球部

昭和後期には文化振興や観光振興を伴いながら躍進し、同 60(1985)年に人口のピークを迎えた。前年には町制施行 30 周年記念事業が挙行され、元陣屋資料館の落成式が大々的に行われた。アイヌ民族博物館や桜ヶ丘運動公園野球場が同年に完成したことに加え、アイヌ古式舞踊が重要無形民族文化財に指定された。同 63(1988)年、白老町は豊かな自然と文化遺産を守り育て、郷土愛に根差したまちづくりを目指す「歴史と文化のまち宣言」を行った。



元陣屋資料館落成式の様子



## (5) 平成以降の白老

平成初期には現在の町並みの形成につながる大きな事業が登場する。代表的なところでは平成2(1990)年12月に開港した白老港があげられ、開港記念祝賀会は465人が参加する盛大なものとなった。当日お披露目された「インカルミントル(眺望の広場)」は、港の全容や太平洋、振り返っては白老の山並みを眺められる展望台であり、名称は公募によって決定された。平成7(1995)年5月には商港区の一部が供用開始となり、開港セレモニーでは「北南丸」がコンテナの積み込みを行った。昭和後期以降、特に大昭和製紙白老工場や関連企業及び旭化成などの進出が相次いだことで、商業都市化を支える港湾への期待が高まっていった。

港湾地区にはこの後、国の樽前山火山対策防災拠点施設と合築した新消防庁舎が誕生する。樽前山は常時観測火山に指定されており、白老町は実際に噴火した場合の危険範囲外かつ風上に位置していることから、初動対応、被害情報の収集、緊急復旧などを行うための前線基地に選ばれた。消防庁舎は同19(2007)年に完成し、防災拠点施設は翌20(2008)年から共用となった。1階には展示ホールが備わり、樽前山の火山構造や被害の可能性、火山防災マップや砂防工事の様子などを展示しているが、災害時には展示物が撤去され、災害対策実務のスペースとして利用される。

シンボルロードは昭和62(1987)年から進められていた構想であり、平成3(1991)年以降に大町商店街の景観を一新する事業となった。白老駅から町役場までの町道を「遺跡」、「コタン」、「仙台陣屋」、「近代」のテーマに分け、各テーマを象徴するモチーフやモニュメント及び絵タイルなどで歩道を飾った。同2(1992)年、白老町ではまちの方向性を象徴するCI(コミュニティアイデンティティ)運動に着手し、シンボルとなるコミュニケーションマークを決定した。大きな笑顔の口の中に明るく映った青空と海、若葉いっぱいの山を配色したデザインであり、メインカラーの青色は「白老ブルー」と命名された。また、「北海道にある、元気まち」のスローガンもこの時に決定した。

CIマークの導入以降はまちづくりへの町民参加が進み、「元気まち研修会」や「元気まち100人会議」、「総合計画」などが協働で策定・実施されてきた。これらの取り組みを継続し一層の町民参加を促すことを目的に、同18(2006)年には「白老町自治基本条例」を施行した。この条例では「情報共有」と「町民参加」を二大原則に掲げ、町民、議会、行政それぞれが果たす役割や責務などを明確にした。

歴史や文化に関する象徴的な変化には、「アイヌの伝統的生活空間(イオル)の再生事業」に関し、同14(2002)年に「中核イオル」に決定したことがあげられる。「アイヌ文化普及活動の実績とその発展性」や「アイヌ民族の人口の多さ」などが評価された白老町では、拠点となる「しらおいイオル事務所チキサニ」を開設するとともに、平成18(2006)年に施行した『白老地域計画(レラコラチ)』に基づく事業を展開してきた。同22(2010)年に「民族共生の象徴となる空間」の建設地が白老に決定した背景も、従来からの施策や事業を含めた白老町の様々な環境が評価されたことによる。令和2(2020)年の開業に併せ、白老町は北海道やJR北海道と分担して駅前広場や自由通路を一新したほか、構内には観光案内ブースを設けた。駅北の観光商業ゾーン(愛称は「ポロトミントラ」)も整備され、観光情報の発信や飲食・物販機能を併有した新たな施設、白老駅北観光インフォメーションセンターが誕生した。



白老港開港式典の様子



白老駅北  
観光インフォメーションセンター

## 2 指定文化財

白老町には国指定2件、町指定7件の文化財が所在する。アイヌ古式舞踊は15の市町で指定されており、白老では熊の霊送りや鯨の踊り、子守歌や杵つき歌などが対象となっている。

町指定文化財では、社台1遺跡出土の縄文時代晩期の土器、アヨロ遺跡出土の縄文時代恵山期の装身具、アイヌ民族の伝統的な刺しゅうを施した木綿衣や生活用具コレクション、白老八幡神社が所有する江戸時代の絵馬、明治時代に当時の白老村へ移住してきた漁師たちが伝える盆踊りがある。

また、平成19(2007)年度から、町に伝わる芸能や技法に精通し、高度に体现できる人物を「伝統文化継承者」に認定しており、令和2(2020)年度までにアイヌ文化の習熟や継承に勤しんできた21名、生活文化の技能保持者2名の計23名を認定している。

表6 白老町の指定文化財一覧

種 別		名 称	指定年
国	史跡	白老仙台藩陣屋跡	昭和41年
	重要無形民俗文化財	アイヌ古式舞踊	昭和59年
町	有形文化財	社台1遺跡出土の朱塗り土器	昭和61年
	有形文化財	アヨロ遺跡出土の装身具等	昭和61年
	有形民俗文化財	ルウンペ	昭和61年
	有形民俗文化財	白老八幡神社社宝5点	平成8年
	有形民俗文化財	アイヌ生活用具コレクション	平成12年
	無形民俗文化財	虎杖浜越後盆踊り	平成12年
	無形民俗文化財	伝統文化継承者 5名〔芸能〕〔食〕〔工芸〕 5名〔食〕〔儀礼〕〔生活〕〔工芸〕〔言語〕 4名〔生活〕〔工芸〕 4名〔住〕〔儀礼〕〔生活〕〔工芸〕〔芸能〕 4名〔芸能〕〔工芸〕 1名〔生活〕	平成19年 平成20年 平成23年 平成25年 平成27年 平成29年



アイヌ古式舞踊



アヨロ遺跡出土の装身具等



ルウンペ

## 3 その他の文化財

白老町は海、山、川、湖といった豊かな自然に囲まれており、幾つもの景勝地があることで知られる。また、多様性に富んだ環境が人々の暮らしを支え、特色ある文化を育んできた。指定文化財以外の風靡な景観や文化的財産から、特に白老町の風土や土地柄に関連が深いと思われるものを、「その他の文化財」として示す。



## (1) 有形文化財

### ①石碑

人々の暮らしの痕跡を伝える石碑は、白老町内に 83 基確認されている。生業の傾向を反映し、魚霊や畜霊（馬頭観音を含む）を慰める碑が多い傾向にある。

このほか、明治 14(1881)年に行われた明治天皇の北海道巡幸に関する碑が 5 ヶ所に残る。休憩所となった記念の駐蹕碑が社台、本町、萩野、虎杖浜にあるほか、宿泊所であった本町地区の民家の中庭に行在所碑が建てられている。

## (2) 無形文化財

### ①アイヌの伝承

白老アイヌの伝承から 2 例を挙げる。

#### 「倶多楽湖の雷神」

白老の古老たちは昔から大事な祭事には必ず登別の奥にいる雷神に酒を捧げていた。雷鳴が激しい時は「クッタラウトから雷神が昇天する音だ」と言って畏まったそうである。

#### 「ポロト湖の伝説」

昔、ポロトの奥にたくさんのアイヌが住んでいた。悪い病気が流行して全滅の危機が迫った時、クマの霊魂が迷っていると知った古老がクマ送り儀礼の頭骨を全て持ち寄り、湖の西側に祭壇を作って祈りを捧げ、頭骨の上に一本のナナカマドを植えた。ちょうどその時、湖面には大鯉が波打つほど集まっており、これによって病気の流行が食い止められたという。

### ②アイヌ語地名

北海道の地名の多くがアイヌ語に由来するが、白老町もアイヌ語由来の地名が多数知られている。代表的な所では、図 7「白老町の位置(2)」に挙げた河川の名称、白老、社台、竹浦、虎杖浜など現在も使われる地域の名称、ポロト湖やポイント沼、倶多楽湖などの湖沼に見ることができる。

### ③どさんこ踊り

昭和 44(1969)年の「第一回どさんこ祭り」の開催に際して、別所透が作詞した「どさんこ音頭」に盆踊り風の振り付けが加えられた踊りである。この祭りは町制施行 15 周年の記念事業であり、祝賀ムードの中でポロト湖畔を始め、全町規模でパレードが実施された。

## (3) 記念物

### ①白老会所跡

会所とは江戸時代に松前藩とアイヌ民族が交易を行っていた施設である。米を生産できない松前藩は各地の会所を家臣に運営させ、その収入を給与として与えていた。また、松前藩も直轄の会所を有し、藩の財政を賄っていた。

白老会所は白老川河口付近の左岸に設けられ、現在の社台地区から虎杖浜地区までを経営の範囲としていた。

### ②アヨロ海岸

「あの世への入口」である「アフルパロ」、アイヌ民族の英雄神であるオキクルミの尻餅跡と言われる「オソロコッ」、カムイが降り立つ特別な場所である「カムイミンタラ」など、アイヌ民族の伝承が豊富に伝えられている。

多くの遺跡が発見される地域でもあるほか、江戸時代中頃には松前藩直営の商場が設定され、明治中頃には新潟県から漁師たちが移住するなど、人々の生活の足跡も色濃く残されている。

### ③ 倶多楽湖

支笏洞爺国立公園特別区域に含まれるカルデラ湖であり、約4万年前の倶多楽火山の噴火によって形成された。水質や透明度が全国トップクラスであり、国内では最も真円に近い湖として知られる。

地下へ浸透した湖水は麓の各所に湧出し、虎杖浜地区には清廉な湧き水をくめる親水公園が整備されている。

### ④ ヨコスト湿原

白老町南東部の沿岸に広がる総面積33ha余りの湿地帯であり、国道36号の南北に小さな湖沼群や水路が点在している。湿原の南側では海岸砂丘が形成され、波浪の浸食から湿地帯を保護している。

460種を超える植生や64種の鳥類及び200種を超える昆虫類が確認され、環境省の「生物多様性の観点から重要度の高い湿地」に選定されている。

### ⑤ ポロト湖と自然休養林

ポロト湖は白老町の南東部に位置する面積約33haほどの淡水湖である。縄文海進期の潟湖であり、湖岸や周辺からは同時代の遺跡が5ヵ所発見されている。湖畔は昭和30(1955)年頃から観光地化が進んだが、ミズバショウの群落や野鳥が飛来する自然環境は健在である。

町立の民俗資料館や財団法人アイヌ民族博物館を経て、令和2(2020)年に国立民族共生公園及び国立アイヌ民族博物館が開業した。

ポロト休養林は昭和51(1976)年に395.65haが林野庁から自然休養林の指定を受けた。クリ、ミズナラ、イタヤカエデ、ハンノキ、ヤチダモなどの天然林で構成される。周辺ではキャンプやカヌー、サイクリング、バードウォッチングなど四季折々のレジャーを楽しめる。

### ⑥ 萩の里自然公園

白老町のほぼ中心に位置する萩野地区に整備された、里山の景観や生態系を維持する自然公園である。520種以上の植生があり、67種の野鳥や9種の哺乳類、105科423種の昆虫が確認されている。

萩野の地名は、明治14(1881)年9月の明治天皇の北海道巡幸に際し、現地に咲き誇っていたハギの花を賞賛したことに由来する。

### ⑦ 温泉

昭和38(1963)年に虎杖浜地区で泉源が発見されて以降、白老町内の各地で温泉が開発されてきた。現在では100近い泉源が確認され、特に虎杖浜地区を中心とするナトリウム塩化物泉と、ポロト湖周辺のアルカリ性単純温泉である「モール温泉」が知られている。

## (4) 文化的景観

### ① サラブレッド牧場

明治20(1887)年、宮城県から入植した片倉主従らが馬の改良と繁殖に努めたことに始まる。昭和5(1930)年に吉田善助が社台地区で経営に着手した「吉田牧場」は、新冠町の「御料牧場」や岩手県の「小岩井牧場」と並び、「日本の三大牧場」として名を馳せた。

現在も国内外のレースで活躍するサラブレッドの馬産地として知られる。

### ② 海産物ロード

虎杖浜地区は、明治中頃に新潟県から移住してきた漁師たちの子孫が多く居住する地域である。新鮮な魚介類を販売・提供する海産物屋が軒を連ね、「虎杖浜たらこ」の名で知られるタラコの加工工場が集中している。

また、街中を流れるアヨロ川では、秋口にサケの遡上を間近で見ることができる。



## (5) 食文化

### ①オハウ

アイヌ民族の伝統的な料理であり、ジャガイモ、ニンジン、ネギ、ギョウジャニンニクなどの身近な食材を用いた汁物である。シカ肉やサケなどの食材により、「ユクオハウ」や「チュプオハウ」と呼ばれる。

### ②虎杖浜たらこ

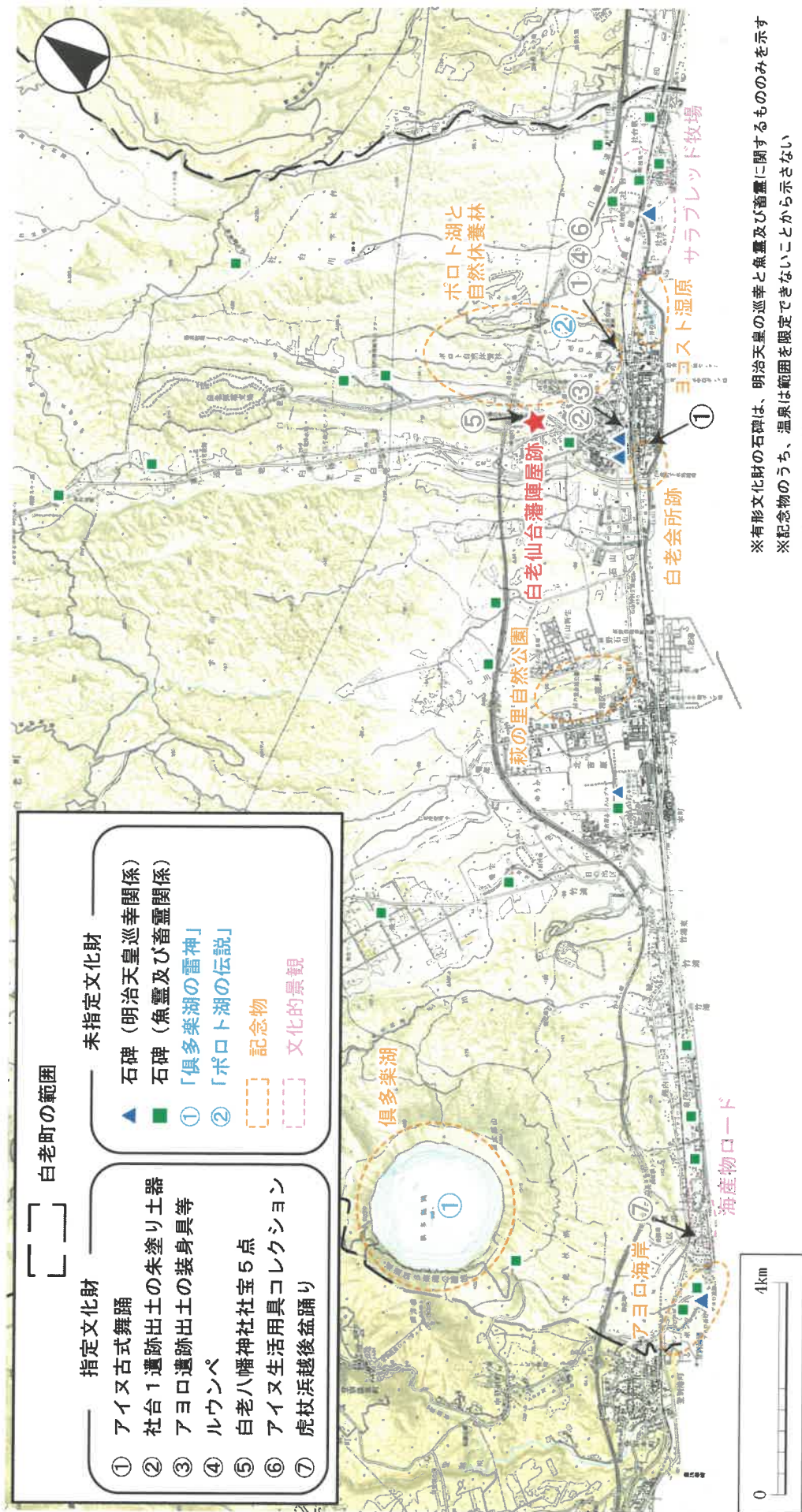
虎杖浜地区の前浜で水揚げされたスケソウダラの卵を原料に、同地域で加工した商品が「虎杖浜たらこ」である。

昭和 40(1965)年頃までは品質への評価は低く、スケソウダラは主に寒干ししたボウダラとして流通していた。しかし、築地市場から訪れた水産荷受会社の社員が商品に注目し、生産の主力を担っていた女性陣を築地へ招いて一級品のタラコ加工の様子を見学させた結果、現地では徐々にタラコ加工への注力と加工技術の洗練化が進んだ。現在では、トップブランドに成長している。

### ③白老牛

畑作や農耕に不向きな土壌である白老町での基幹産業化を図るため、昭和 29(1954)年に気象条件が類似する島根県より黒毛和種 44 頭を導入した。現在は年間で 1,400 頭の出荷頭数を誇る産業に成長した。

白老牛を用いた一般的なメニューにはステーキ、焼肉、ハンバーグのほか、道産小麦で作ったバンズで挟んだ「白老バーガー&ベーグル」がある。



※有形文化財の石碑は、明治天皇の巡幸と魚霊及び畜霊に関するもののみを示す  
 ※記念物のうち、温泉は範囲を限定できないことから示さない  
 ※食文化は範囲を限定できないことから示さない

図 15 白老町の文化財の位置図  
 『白老町全図』（北海道地図図株式会社販売）を基に作成